

# 社 会 科

## 「現代社会」考

都 築 亨

### I はじめに

「現代社会」がいよいよこの4月から1年の社会科に登場した。本来ならば、この紀要の論稿に「現代社会」1年間の実践記録を載せるべきだろう。事実他の附属高校では数年も前から先導的試行の一環として、いろいろなカリキュラムが発表され、その実践報告も出されている。枚挙にいとまがないほどである。

われわれが高校の社会科を担当していて、当然この年から「現代社会」を発足させることは熟知しながら試案を公表できなかったのは、内部的にはかなり前から討議を重ねていたにも拘らず、結論の一致をみることができなかったからであり、同時にそのことは、「現代社会」を含めて、新しい教育課程にかなり懐疑的見解をもっていたからでもある。当附属校内の教育課程委員会の中でも、最も否定的で、場合によれば非協調的なポーズをとってきたのがわれわれ社会科のメンバーであった。社会科の多数意見を集約すると次のようなことになるかと思う。

(1)新教育課程が全体として授業時間数を減少させ、「ゆとり」をもたせる方向については必ずしも反対ではないが、そのために社会科内の科目構成に歪みを生じ、生徒たちの社会認識に偏りをもたせるような案はとるべきではない。

(2)必修科目としての「現代社会」の設置は、95%の進学率を示すまでになった高校にあって、すべての生徒たちに「現代社会」に対する判断力の基礎と、人間の生き方について「学習させる場面を確保した」という点では評価できるが、中学・高校を一貫して「社会科」の内容構成を考えた時、特に中学3年で学習する「公民的分野」の内容とのかゝわりをどのように考えたらよいか。

できれば1～2年に分割履修の形で「現代社会」を位置づけ、歴史的内容科目(日本史・世界史)との有効なかゝわり方を構案したい。

(3)1年の必修科目の内容検討は後にゆづるとしても、2～3年の社会科における科目選択のしかたには更に問題点が多い。できれば2年の段階でかなり必修科目を残して、3年になってから選択制を導入する案がとれないものか。大勢としては2～3年において文系・理系の選択制をとり、文系は社会科の科目選択を多く

し、理系は理科の科目選択数を多くするという方向に傾斜するだろうが、社会科としては理系の生徒たちに対しても社会科の習得内容、特に歴史・地理をすべての者に学習させ得るような努力をすべきである。「歴史」(日本史・世界史を総合した)4単位必修のプランも検討したい。※(1)

(4)「現代社会」の内容についてもかなり問題を感じる。「社会と人間に関する基本的な問題を中心として内容を精選・集約して構成」という基本的視点には異論をさしはさむものではないが、指導要領の中で「内容」として掲げられたものを検討すると、これだけを必修にしなければならない根拠に乏しく、2～3年で、「日本史」「世界史」「地理」を選択しない生徒に対しても、これさえ学習できれば基礎的なものとしては充分だといえるだけの内容を包括しているとはいえないのではないか。

とはいえ、現実「現代社会」がスタートし、教科書採択に直面してその内容を洗い直さねばならない段階に立ち至ってみると、評論家風に論議している時ではなく、自らの「指導内容」をふまえながら、問題点を解決してゆかねばならないという現実を強く意識せざるを得ない。以下、「現代社会」についてのわれわれのとり組み方を示して、御批判を得たいと考えている。

### II 戦後30年の社会科の歩みの中で

戦後教育課程の改訂も今回で5度目、そして、試行錯誤の連続ともいえる対応の仕方、社会科の内容も徐々に姿をかえてきた。ふりかえってみると既に30年の歳月を閲している。新教育の申し子と呼ばれて颯爽と登場しながら、このごろやゝお荷物扱いされかねない社会科である。小・中学校ではかなり定着してきたという面をもちながら、高校では改訂の度毎に保守化・反動化という側面を付加されて来たかのようにも見うけられる。

昭和26年の高校社会科は、「日本史」が復活し、又「世界史」が初めて日本の教科史の中に登場したという画期的ななかみを持つものであったが、「一般社会」「時事問題」は22年の指導要領以来、引きつづいて社会科の中心的科目として位置づけられた科目であり、特に「一般社会」は「新しい学校生活並びに第2学年以上で分科する社会科の諸科目(日本史・世界史・人

文地理・時事問題)へのオリエンテーション」という位置づけと性格をもたされていた。この「一般社会」の社会科学の科目構成の中において占める位置は、新指導要領の中での「現代社会」の位置づけとかなり似ている。

翌27年の講和独立を契機とする社会科学の改訂作業はかなり復古的イデオロギーの強化復権をその内容に含むものであり、岡野文相の教育課程審議会に対する「社会科学の改善、とくに地理、歴史、道徳教育について」の諮問の内容や、その答申にもとづく「社会科学の改善についての方策」(昭28, 8, 22)には、社会科学の解体、地歴の強化の色あいが強く織り込まれ、これについて社会科学問題協議会は6度にわたって反対声明を出していた。

そして昭和31年の学習指導要領では「一般社会」と「時事問題」が姿を消し、代って「社会」が新設された。この中で倫理的内容が加味され、35年の指導要領では更に「社会」が「倫理・社会」と「政治・経済」とに分かれる。世界史と地理が、A・Bに分けられたのもこの時である。

これ以後第4次改訂(昭45・10)によって56年までの「社会科学」の枠組みが固定化されてきたかにも見えるのであるが、今回の改訂は、そのやゝ固定化し硬直化してきた高校の社会科学に対してかなり思い切った改革を加えようとしたものであるとの評価はできるであろう。

この改訂のいと口になった教育課程審議会の答申(51, 12, 18)の中で「社会と人間に関する基本的な問題についての理解を一層深め、現代社会に対する判断力の基礎と人間の生き方について自ら考える力を養うため」新しい科目「社会」を設け、これを低学年において全員に履習させる」としているのは、「現代社会」新設の意図を端的に表明したものであり、このねらいを実現するため「現代社会の政治や経済に関する内容人間の生き方に関する倫理的な内容のほか、人類と環境、現代社会と科学技術、日本の文化と伝統などにかかわる内容を効果的に取り入れ、広い視野に立って社会についての考え方や学び方などの基礎が習得できる科目※(3)」としている。

科目構成の面において「一般社会」に比定できると先に指摘したが、その内容の上から考えるとむしろ、31年度の「社会」とかなり近い装いをもっているといえる。少くとも「倫理社会」「政治経済」に分化した後の社会的科目の内容と比べて、「社会」のもっていた内容的ひろがり、対象の多様性、そして民主性

即ち(1)民主政治 (2)日本の政治 (3)国際政治 (4)経済生活 (5)日本経済の諸問題 (6)国際経済 (7)農村生活の向上 (8)労働関係の改善 (9)社会福祉の増進

(10)個人と社会 (11)人間の理念と民主的社会 (12)社会生活のあり方と文化の創造

それらのすべてを包括する「社会と人間に関する基本的問題」を総合的に学習する場が「社会」であった。そして、「現代社会」が現時点において追求する課題もそのあたりにある。ただし、昭和31年の時点における「社会」の内容が当時の社会状況に対してもっていた先進性とひきくらべたとき、昭和57年の現在における「現代社会」の内容が、現実の社会的状況、高度成長下の社会的現実に対して充分に対応し得るだけの内実を備えているといえるだろうか。

### Ⅲ 現代における社会認識

昭和30年ごろと現在(昭和50年代後半)、この四半世紀における日本の社会的状況の変貌は、それまでのどの時代よりも急激であり、他のどの国もこの期間において現在の日本が示したほどの高度成長を達成していなかった。

新しい社会の転換期において、教育を通じて新しい社会認識の形成がはかられようとし、そしてそれがあつた程度の成功をおさめたと考えられる唯一の例は、恰度今から百年前、明治初期の文明開化の波の中にあつて、学制公布から13年ごろまでの教育政策であり、この時点における教育内容が社会的状況に対してもっていた先進性であった。福沢諭吉を筆頭として文明開化期のオピニオンリーダーとしての役割をつとめてきた人々の意識の中には、教育を通して「開化」を推進しようとし、又その教育の主流に学校教育を位置づけ、しかもその学校教育のなかに「読書算」のみでなく、「実学」が意識され、世界への目を啓くことが要請されていた。学制被仰出書(1872, 7)は、「…而て其身を脩め智を開き才芸を長ずるは学にあらずんば能わず是れ学校の設定あるゆゑん」とし、小学校において、福沢の「世界国尽」「童蒙教卓」「学問のすゝめ」「西洋事情」小幡篤次郎の「天変地異」内田正雄の「輿地誌略」が学校で使用するに適当な書物とされ、1873年の「小学読本」は、「凡地球上の人種は、五に分れたり、亜細亜人種、欧羅巴人種、馬來人種、亜米利加人種、亜弗利加人種、是なり」で始まっていた。かな文字もろくろく知らない子供にこれを暗誦させるということの可否は別として、驚くべき内容であり、しかも国語の教科書の中で、世界への視野をひろげるべき社会認識の形成が期待されていた。

国史よりは万国史が重視され、しかも歴史よりは地理的内容の方が小学校でウエイトを置かれ、(明治19年検定教科書となった時点で歴史は、日本史のみ高等小学校で学ばれることになったか、)明治40年の改正小学校令で尋常小学校が6年に延長されるまでは、義

務教育段階(尋常科4年まで)では、歴史、地理とい  
 独立科目は存在せず、社会認識の形成は読方その他の  
 授業を通じて行なわれてきたのであった。

私は今こゝで戦前の教育内容について論議しようと  
 しているのではない。百年前の日本において学校教育  
 のなかみの中に極めて先進的内容が位置づけられ、歴  
 史、地理といういわば「社会科」の枠ぐみの中にとり  
 こまれている科目ではない、一般の科目の中であって  
 さえも、極めて高度の社会認識の形成が期待されてい  
 たのである。

今や確実に現代化を達成し、高度成長をとげてきた  
 日本の経済社会の変容過程にあつて、「教育」は今ま  
 でのどの時代よりも高度の社会認識を必要とし、しかも  
 かつての様に「知識エリート層」に対してはとびぬけ  
 て近代的知識に基づく高等教育を施し、国民大衆対  
 しては忠誠な「皇民」としての教化を推進するという  
 様な二面性をもつのではなく、すべての(或は高校に  
 ついては95.1%の)国民に対して、確かな社会認識を  
 形成させなければならない段階にさしかゝっている。

明治の「近代化」は「西欧化」であり、社会認識に  
 おける近代・文明の指標も西欧・アメリカにあつた。  
 日本はたゞそれに追随すること、接近することを意識  
 するだけでよかつた。現在、科学技術の発展、高度工  
 業化、技術革新 Innovation 自動制御 Automation  
 化、に伴う産業構造の変化、生活様式の変化、情報  
 化社会、都市化にともなう新しい地域社会の出現 等  
 等、多くの面において、日本は世界の他のどの国も経  
 験しなかつた文明の最先端走者が直面しなければなら  
 ない局面に遭遇している。この社会的状況に対応しう  
 る社会認識の形成が、現在の「社会科」の教育の中  
 で果して可能なのだろうか。もはや「モデル」は存在  
 しなくなっているのである。

昭和31年の「社会」の内容項目にあつた「国民経済  
 の機構と機能」や「今日の日本経済の課題」「農村生  
 活の課題」等の学習内容とそれに依拠する社会認識は、  
 当時の社会状況の中では、時代の一步前を見ていたし、  
 又、生徒達にその新しい社会を意識させようとするに  
 足る何かをもっていた。

しかし、その内容と同一の内容を「現代社会」にと  
 り込んできたとしたら陳腐といわれてもしかたがない。  
 現在の日本の農村は昭和28~30年当時の農村が抱えて  
 いた問題状況とは全く違っているのである。農村の分  
 析については今日25年前の感覚で「現代社会」の教科

書に筆をとっている筆者はさすがにない。しかし、そ  
 れと対応関係にあるはずの都市、労働、消費等の問題  
 について、「現代社会」の数社の教科書記述は、公式  
 的、観念的であり、20年前の進歩的経済学説、社会理  
 論の敷衍・こじつけの域を出ないものも二三見うけら  
 れる。教科書の分析については後にまとめて論じたい。

「現代社会」の学習を通じて獲得されるはずの社会  
 認識は、現代社会に対する「判断力の基礎と人間の生  
 き方について自ら考える力」をねらいとし、「体系的  
 な知識として理解させるのでなく」又「抽象的で高度  
 な事項に深入りしない」で、「ものの見方や考え方及び  
 学び方を習得させる」ものであるとすれば、教科書の  
 記述内容よりはそれ以外の新聞・雑誌・テレビ等の解  
 説・評論による認識の形成、しかも直観的認識・映像  
 認識の方がはるかに大きな影響力をもつことであらう。

それらの素材を利用しながら、そうした映像認識に  
 よる社会認識に方向づけを与えるのが「社会科」教育  
 の役目ではないかと思う。

#### Ⅳ 中学校社会科「公民的分野」と「現代社会」

今回の教育課程改訂の基本的な原則の一つは小中高  
 を一貫する教育内容の見直しであり、「小学校・中学  
 校及び高等学校の社会科を一貫的に把え、そこにおけ  
 る高等学校社会科の位置と役割を明確に」し、「現代  
 社会」の内容・構成においては「中学校までの学習の  
 成果を生かし、より広い視野から、これまでに学んで  
 きたそれぞれの内容を、社会や人間に関する基本的な  
 問題としてとらえ直し、より深く考えるような発展的  
 な指導を」期待している。もとより、その目標の上か  
 らも、「個人の尊厳と人権の尊重」「現代の社会生活  
 における個人の役割」の理解や「社会の諸問題」につ  
 いて「自ら考えようとする態度」の育成をねらう中学  
 公民的分野は、「人間の尊重と科学的精神」に基づき、  
 「社会と人間に関する基本的問題」の理解を深め、  
 「人間の生き方について自ら考える力を養う」ことを  
 意図する「現代社会」とかなり重なりあう面をもち、  
 又「公民的分野」の内容は、そのかなりの部分におい  
 て「現代社会」の第二領域と共通する面をもっている。  
 下表は内容における両分野の対応関係を示したもので  
 あり、指導要領の各項目とともに二・三の教科書にも  
 られている内容に対応させ、整理したものである。

中学校社会科 公民的分野		高等学校 現代社会	
項目	学習事項	学習事項	学習内容
(1) ア	民主政治と現代の社 会生活	(1) 現代社会の基本 的な問題	1 現代と人間 (1)現代社会の特質

「現代社会」考

中学社会科 公民的分野			高等学校 現代社会	
項目	学習事項	学習内容	学習事項	学習内容
イ	個人と社会 、人間の尊重と社会 生活)	現代の家族生活 (2)地域社会とその変化 地域社会の生活 (3)地域開発と住民福祉 (4)生活環境の変化 公害の防止と環境保 全環境	A 現代と人間 1 現代社会の成 り立ちと人間 生活 2 人類と環境	産業社会 大衆社会 情報 化 マスコミ官僚制 現代 の家族 (2)環境とは何か(生態系とし ての環境) 環境の改変 環境問題 産業 廃棄物 公害 自然 環境の危機 (3)世界の人口問題 人口推移 先進国の人口問 題発展途上国の問題 (4)資源問題 偏在性 食料不足 石油問 題
	(2) 国民生活の向上と経 済	2 消費生活と経済 (1)生活の中の経済 生産と消費 (2)価格物価と消費者 価格, 需要と供給 (3)競争と独占 大量生産と大企業 独占禁止法 (4)物価とその働らき インフレとデフレ (5)消費と家計 生活を支える収入 消費支出, 貯蓄, 保 険, 租税	3 人口問題と資 源・エネルギー	(3)世界の人口問題 人口推移 先進国の人口問 題発展途上国の問題 (4)資源問題 偏在性 食料不足 石油問 題
ア	消費生活と経済のし くみ 〈経済のしくみと生 活〉	(4)物価とその働らき インフレとデフレ (5)消費と家計 生活を支える収入 消費支出, 貯蓄, 保 険, 租税	B 現代の経済社 会と国民福祉 1 科学技術の発 達と現代の経 済生活 生産の拡大と 現代の企業 市場機構と政 府のはたらき	2 科学技術の発達と生産の拡 大 (1)技術革新と生産の拡大 産業構造の変化 都市型生 活様式大量消費 流通機構 の変化 企業形態 大企業 と中小企業会社 (2)市場機構と政府の役割 価格 競争 寡占市場 大 企業と生産集中 物価とイ ンフレ 景気の循環 (3)政府の経済的役割 金融政策 金利政策 公開 市場操作 (4)社会主義経済の特徴 (5)財 政 租税 地方財政 (6)国民所得 GND (7)高度経済成長 日本経済 国際環境 日本の貿易構造 の変化 国際収支 貿易摩 擦
イ	職業生活と生産労働 〈現代の社会と職業〉	3 現代の社会と職業 (1)生産と労働 労働者 と生活 (2)現代の生産と企業 公企業と私企業 株 式会社 大企業と中 小企業 公益事業 (3)国民生活と財政 政府の経済的役割 財政 予算歳入 租 税 財政政策 金融 政策 財政投融资 (4)生活や生産の基礎づ くり 経済成長と公害 (5)消費者の権利と保護 (6)労働者の基本的権利 労働基準法労働組 合法 雇用と労働条件 不況と失業 (7)基本的人権と社会保 障	2 現代の経済社 会と国民福祉 1 科学技術の発 達と現代の経 済生活 生産の拡大と 現代の企業 市場機構と政 府のはたらき  経済体制	2 科学技術の発達と生産の拡 大 (1)技術革新と生産の拡大 産業構造の変化 都市型生 活様式大量消費 流通機構 の変化 企業形態 大企業 と中小企業会社 (2)市場機構と政府の役割 価格 競争 寡占市場 大 企業と生産集中 物価とイ ンフレ 景気の循環 (3)政府の経済的役割 金融政策 金利政策 公開 市場操作 (4)社会主義経済の特徴 (5)財 政 租税 地方財政 (6)国民所得 GND (7)高度経済成長 日本経済 国際環境 日本の貿易構造 の変化 国際収支 貿易摩 擦
ウ	国民生活と福祉	(4)生活や生産の基礎づ くり 経済成長と公害 (5)消費者の権利と保護 (6)労働者の基本的権利 労働基準法労働組 合法 雇用と労働条件 不況と失業 (7)基本的人権と社会保 障	2 日本経済の特 質と国際化 国民所得の働 き 景気の変動 国際収支の動 向	(7)高度経済成長 日本経済 国際環境 日本の貿易構造 の変化 国際収支 貿易摩 擦
(3)	日本の政治と国際社 会	4 日本の政治 (1)くらしの中の政治 政治の働き	3 経済の調和あ る発展と福祉 の実現 消費者保護と 企業の責任 人間の尊重と	3 経済発展と福祉の実現 (1)企業の社会的責任と消費者 保護 (2)人間の尊重と公害の防止 (3)労働基本権と労働条件の改 善
ア	民主政治と法	4 日本の政治 (1)くらしの中の政治 政治の働き	3 経済の調和あ る発展と福祉 の実現 消費者保護と 企業の責任 人間の尊重と	3 経済発展と福祉の実現 (1)企業の社会的責任と消費者 保護 (2)人間の尊重と公害の防止 (3)労働基本権と労働条件の改 善

中学社会科 公民的分野		高等学校 現代社会	
項目	学習事項	学習内容	学習内容
イ	議会制民主主義	人権を保障する政治 大日本帝国憲法から 日本国憲法へ (2)日本国憲法の特徴 国民主権 平和主義 基本的人権 (3)三権分立 議会政治(国民主権 と国会) 議院内閣 制 行政権と内閣 制 政党政治 選挙制度 裁判 (4)世論と政治 国民の政治参加	公害の防止 労働条件と労働 関係の改善 社会保障と福 祉社会の実現 C 現代の民主政 治と国際社会 1 日本国憲法の 基本的原則と 国民生活 基本的人権の 保障と法の支 配 平和主義と我 が国の安全 国民主権と議 会制民主主義 2 現代国家と民 主政治 国家と個人 地方自治と住 民福祉 世論と現代政 治 世界の主な政 治体制 3 国際平和と人 類の福祉 国際法と国際 政治の特質 国際連合と集 団安全保障 核兵器と軍縮 問題 人類の福祉と 日本の役割
ウ	選挙と政党		労働三法 雇用問題 (4)社会保障制度 高齢化社会 問題点 4 日本国憲法 憲法のはたら き 日本における憲法の歩み (1)日本国憲法 その成立と基 本的原理 国民主権 平和 主義 基本的人権 (2)国民主権と議会制民主主義 国会 内閣 裁判権の独立 象徴天皇制 (3)平和主義とわが国の安全 (4)地方自治と住民福祉 (5)民主政治の基本原理 世論 政党 マスメディア 政治的無関心 (6)西欧民主主義体制と社会主 義
エ	国際社会と平和	5 国際平和 (1)国家 主権 領土 (2)国際政治 国際法 国際連合 (3)国際経済の中の日本 国際経済のしくみと 変化 先進資本主義 国 発展途上国 社 会主義国との関係	5 国際平和と人類の福祉 (1)国際社会の政治 組織 国 際法 国際連盟の成立崩壊 国際連合の組織役割 (2)国際政治の展開 東西陣営と冷戦 国際政治 の多極化 第三世界 核兵器 軍縮問題 (3)国際政治と日本
(2)エ	貿易と国際協力		6 世界の諸地域の文化 (1)文化の多様性普遍性 文化 交流 世界諸地域の文化 (2)日本文化の伝統 習俗 民族性 伝統 基層文化 外来文化 生活の中の文化 年中行事まつり (3)現代の文化 大衆の文化 情報化社会の 文化 若者文化
(1)ウ	現代の文化と生活 く人間社会と文化	6 人間と文化 (1)生活の中の文化 マスコミュニケーション (2)現代文化の諸問題 大衆化画一化商品化 (3)文化の継承と創造 (4)文化の保護と創造	(2) 現代社会と人間 の生き方 A 人間生活にお ける文化 1 世界の諸地域 の文化と文化 交流 2 日本の生活文 化と伝統 3 現代の文化

「現代社会」考

中学社会科 公民的分野			高等学校 現代社会	
項目	学習事項	学習内容	学習事項	学習内容
			B 青年と自己探究 1 現代の青年の心理的・社会的諸問題 2 適応と個性の形成 C 現代に生きる倫理 1 真理を求めて思索することの意義 2 よく生きることと生きがいの追求 3 民主社会の倫理	7 現代に生きる倫理 (1) 真理を求めて 学ぶこと 模倣 思索 理性 (2) 生きがいの追求 人生における宗教 芸術 職業 余暇 (3) 古典民主主義と近代民主主義 社会契約 ヒューマニズム 人格尊重 自由 権利

V 「現代社会」と「地理」「政経」「倫理」

「現代社会」は高等学校社会科の唯一の必修科目であり、それ以外の選択科目である「日本史」「世界史」「地理」「倫理」「政経」の特殊的分野に対しては一般的基本的分野としての位置づけを与えられている。5科目の選択科目中実際に履習できるのは2～3科目であることを考えると、「現代社会」は残された科目の内容についてもある程度は立ち入った構成をとら

なければならないし、少くとも5科目に対してのオリエンテーションとしての役割を果たすべく期待されている。

まず「地理」「政経」「倫理」の3科目だけをこゝに取り上げたのは、他の2科目と比べて「現代社会」により近い関連をもつものと考えられるからであり、特に「当分の間、特別の事情がある場合には」「倫理」及び「政治・経済」の2科目の履習をもって代える措置が認められているからである。

関連を表示すると次のようになるかと思う。

現代社会	地理	政治経済	倫理
(1) 現代社会の基本的な問題 現代と人間 ①現代社会の成り立ちと人間生活 ②人類と環境 ③人口問題と資源・エネルギー ④科学技術の発達と現代の経済生活	(1) 人類と地球 ア人類の諸集団と生活 イ生活舞台としての自然 ウ自然環境と社会環境 (2) 人口と資源・産業 ア人口の地域的特色 人口の分布と増減 人口構成 イ食料の生産と消費 ウエネルギー資源と原料資源	(1) 資源・エネルギーの活用 公害の防止 (2) 日本の経済と国民福祉 現代の経済の特徴とはたらき 経済社会の特徴変容, 現代の市場と企業 国民経済の構造と経済成長 国富と国民所得, 経済の安定・成長と金融, 財政 国際経済と国際協力 国際経済の動向, 経済体制	

現代社会	地理	政治経済	倫理
⑤日本経済の特質と国際化 (国民所得の動き, 景気の変動, 国際収支の動向)	エ工業化と工業地域 オ地域開発と環境保全	の変化, 国際経済における日本の役割  日本経済の現状と国民福祉	
⑥経済の調和のある発展と福祉の実現	(4)のア 世界の貿易	(1) 日本国憲法と民主政治 日本国憲法の基本的性格 民主政治の基本原則の基本的性格	(2) 日本の思想 思想と風土 日本人にみられる人間観や自然観と風土 思想と伝統
現代の民主政治と国際社会		基本的人権の保障 自由権的基本権と生存権的基本権, 基本的人権と公共の福祉	(1) 人間の自覚 自己探究と思想の源流
⑦日本国憲法の基本的原則と国民生活 (基本的人権の保障と法の支配, 平和主義と我が国の安全, 国民主権と議会制民主主義)		政治機構と政治の運営 国会・内閣・裁判所の機構と機能, 地方自治 現代の政治における課題	ギリシアの思想, キリスト教, 仏教, 儒学などの基本的な考え方と人間の自覚についての意義 現代に生きる思想
⑧現代国家と民主政治		(3) 国際社会と日本 国際関係と国家 国際関係の基本的要因, 国際法, 国際政治の特質, 国際連合と国際協力 国際平和と人類の福祉	(3) 現代社会と倫理 現代の思想的課題 現代の主な思想にみられる共通で基本的な課題
⑨国際平和と人類の福祉 (国際法と国際政治の特質, 国際連合と集団安全保障, 核兵器と軍縮問題, 人類の福祉と日本の役割)	(2) 現代社会と人間の生き方 人間生活における文化		
(2) 現代社会と人間の生き方 人間生活における文化	⑩世界の諸地域の文化と文化交流		
⑩世界の諸地域の文化と文化交流	(3) 生活と地域 ウ国土と住民 エ世界の地域		
⑪日本の生活文化と伝統	(4) 世界と日本 ア世界の結合 イ世界における日本		
⑫現代の文化 青年と自己探究			
⑬現代の青年の心理的・社会的諸問題			
⑭適応と個性の形成			
現代に生きる倫理 ⑮⑯⑰			思索と倫理的自覚

## VI 日本史・世界史と「現代社会」

以上の3科目と比べると「日本史」「世界史」は直接には内容の面で「現代社会」とオーバーラップする面は極めて少ない。むしろ他教科の方が関連性をもっている観すらある。「理科1」の中項目「人間生活と自然調和」(人間と自然との相互作用, 自然開発と環境保全)「人間生活と資源エネルギー」(天然資源 エネルギー開発)或は「保健」の中の「心身の機能」「保健と環境」「職業と健康」「集団の保健」など「現代社会」の内容に近いものがある。

それらよりも「日本史」「世界史」が「現代社会」と稀薄な関係にしかないとすれば, やはり問題であろう。「日本史」「世界史」を選択しない場合には「現代

社会」のみで歴史的内容を素通りし, そしてもし「現代社会」の内容に歴史的なものが欠落していたら, 歴史認識ぬきの現代社会認識が成立することになるのである。

新指導要領の中で「日本史」は「文化の総合学習」という色あいを強く打ち出され, 「地域社会の歴史と文化」が内容の7項目に特に1項目をさいているが, これらの点は「日本史」の学習を「現代社会」の意図している方向に接近させ, 同じように「世界史」が「現代世界の各地域における社会と文化の独自性と異質性」とについて, その形成の時期にさかのぼって学習することを要請されている点も「現代社会」の第二領域のうち「世界の諸地域の文化と文化交流」において「世界の諸地域の文化に目を向けさせ, 文化の多様性,

異質性に気付かせ、それぞれの文化が多様で異質的でありながらも、共通したものを、普遍的なものをも内包していることに気付かせ、人類文化として共通の基盤となるものは何かを考えていくことをねらいとし<sup>※(5)</sup>ていることと対応している。

新指導要領における「日本史」「世界史」の文化指向についてはいろいろの批判がある所であるが、私は日本史の地域史の重視と世界史での「文化圏学習」については前向きに検討すべき方向だと考えている。特に「世界史」は民族と宗教に結びついた各地域の文化社会の「独自性」「異質性」をその形成過程の中で省察するという視点で今新しく再構成されねばならないと思う。そしてもし、そうした観点での「世界史」が構成され、高校生に学習される様になるならば、「現代社会」の「人間生活における文化」の項は「世界史」で代替履習する方が望ましいときえも思う。

だから「世界史」を学習しないで「現代社会」だけの学習で高校をおえる一部の生徒の歴史認識の形成がこの内容だけで充分かどうかという観点で考えたとき、極めて否定的判断に立たざるを得ない。

たしかに「現代社会」には、現代の「人間生活における文化」が取り上げられ、日本の文化の伝統を問題にし、世界の各地域の文化、特にその多様性・異質性に「気つかせ」ようとしている。しかし、それは文化の「歴史性」(伝統ではない)よりは、「地域性」にバイアスがかかり、時には「文化人類学的」視点ないし「民俗学的」視点による把握に終始する。新しい教科書の中で「人間生活における文化と歴史」の章立てをしている教科書が1社、日本史の流れの中で外来文化の摂取や文化形成を主軸にして文化の問題にアプローチしようとしている教科書は4社である。

教科書の分析については次節に、更に「エコロジーと文化」の内容についての考察について終節にまとめおきたい。

## Ⅶ 「現代社会」教科書の分析

今年4月から高校の現場に登場することになった「現代社会」の教科書は、その内容と検定のプロセスにおいて新聞週刊紙にひろく喧伝され、一部政治問題化しようとした面さえあったが、現実に公刊され、採用されている21種の「現代社会」教科書をみると、指導要領の表現についてあたるのとは違って、より具体性をもった「現代社会」の正体を掴み得た感をもつことができる。実際はこの教科書をこえて、「授業」の中で「現代社会」がどのように展開されるかが問題であろうが、今私達なりにこの検定教科書の構成と内容を検討して、今後に備えたいと思う。

### (1) 教科書の類型と各分野の量的比較

指導要領の配列項目にそのまま準拠しなくともよいのであろうが、その構成において指導要領の配列とかなり異った順序をとり、又全く別の章立て(構成)をとっている教科書もある。内容とは別にその構成によってもある意図がうかがえるし、同じ配列章立てをとりながらもそのウエイトの置き方は千差万別である。内容的検討はやゝ手におえない面もあるのでとりあえず、教科書の類型と分野別のウエイトの置き方について検討する。

指導要領の第一分野「現代社会の基本的な問題」で扱う内容は3つ、**a**「現代と人間」(現代社会, エコロジー)**b**「経済と福祉」**c**「政治及び国際問題」第二領域の「現代社会と人間の生き方」に含まれる内容領域は3つ、**d**「人間生活と文化」**e**「青年と自己探究」**f**「現代に生きる倫理」に分けられると思う。

類型として、**a**~**f**までの内容をほぼ順序通り配列している教科書を第一類(指導要領準拠型)とし、それ以外に構成を変えているものをほぼ2つに類型化した。即ち第二類として 政治**c**を経済的分野**b**の前に位置づけたもの(その中に**a**を先に出したものと経済の後に**a**を位置づけたのがあるが同類型(政治先行型)とした。第三類は、「文化」**d**ないし「青年の生き方」**e**を先行させ、かなり大きな配列構成のくみかえをしているもの(文化先行型)である。

検討した教科書は次の21種であるが、一応書名と編集責任(筆頭)者と出版社を掲げ、後の記述中にはすべて記号であらわしたい。

- ・「現代社会」勝部真長(中教出版)・「現代社会」平田嘉三(第一学習社)・「高等学校現代社会」阿部照哉(学習研究社)・「現代社会」奥平康弘(一橋出版)・「高校現代社会」堀尾輝久(実教出版)・「現代社会」都留重人(実教出版)・「標準現代社会」杉原泰雄(自由書房)・「現代社会」辻清明(自由書房)・「現代社会」河野健二(教育出版)・「現代社会」大来佐武郎(好学社)・「詳説現代社会」正井泰夫(二宮書店)・「高校現代の社会」(同上)・「新現代社会」江口朴郎(三省堂)・「現代社会」北川隆吉(三省堂)・「現代社会」梶 哲夫(清水書院)・「現代社会」小牧治(清水書院)・「現代社会」大島清(数研出版)・「高校生の現代社会」岩田慶治(帝国書院)・「現代社会」湯浅泰雄(東京学習出版)・「現代社会」宇沢公文(東京書籍)・「現代社会」碧海純一(山川出版社)

第一類(指導要領準拠型)に入るものは次の12社である。(C~Yは出版社をあらわし、同一の社のA, Bは2種類の教科書を出している場合である。)

D社 G社 H社 J社 E社 S社 F社 FB社 O社 Q社 NA社(最終部分を統一的に)



M社 ( [e][d] を入れかえ )

( 数字は本文頁数に対して各部分の占める%をさす )

第二類 ( 政治先行型 ) 4社

LA社 LB社 C社 ( 「現代とは」の次にC ) K社

( 〃 )

第三類 ( 文化先行型 )

① T社 ( 文化につづいて [a][b][c] を ) Y社 ( 第一領域と第二領域を入れかえ )

② J社 ( 青年と文化へ ) SA社 ( 青年の後は普通に )

③ NB社 ( エコロジーと文化から入り [e][f] をまとめ )

構成だけでどれが優れているかは判断できないが、二、

三類に数えた9種類の教科書をみるとそれぞれユニークで

「現代社会」について何らかの新しい切り込み方をしよう

と試みていることは評価できる。憲法から入るのも一つの

見識であり、文化・エコロジ

ー的分野から現代社会に入るのも新しい試みであろう。

問題の第2は第一領域、第二領域をそれぞれ3つに分け、

頁数の上でどの部分にウエイトをかけているかという点である。

配列構成とは別に、各教科書の執筆編集にあたってどの

部門に重点をおき、どのような社会認識を教科書を通じて

投影しようとしているか頁数のさき方から推しはかってみ

たい。[b]と[c]の内容即ち政治・経済的内容に多くの頁をさ

いている教科書を一方から、逆にエコロジー、文化に多くの

頁をさいているものを他方から並べかえてみると右の様

になる。

右のSB社 JB社 JA社の教科書は明らかに政治・経済優位の「現代社会」であり、

かなり古典的な意味での真面目さで編集方針を固めている

教科書 (記号)	a (現代と人間)	b (経済)	c (政治)	d (文化)	e (青年)	f (倫理)	本文 頁数
C	10.0%	20.0%	22.3%	12.3%	9.2%	22.7%	260 <sup>頁</sup>
D	16.2	18.6	24.0	13.1	11.6	15.8	258
G	14.3	18.8	21.4	14.9	8.4	19.2	307
H	15.3	×17.9	26.2	•16.0	8.3	15.0	312
JA	9.2	24.1	27.6	11.3	7.8	18.7	282
JB	12.7	•27.5	25.4	12.7	5.6	15.5	283
LA	10.9	25.8	23.7	14.1	8.1	16.3	282
LB	12.0	23.6	24.6	13.3	7.6	18.0	300
K	10.1	23.7	×18.9	14.2	9.4	19.3	295
E	10.2	22.9	20.5	10.6	6.6	•26.5	301
NA	•20.0	22.3	20.7	16.1	(20.3)		260
NB	(36.6)	30.3	×14.6	(36.6)	6.2	11.5	191
SA	12.5	22.4	24.4	11.8	9.9	16.8	303
SB	×7.2	25.8	•29.1	×7.9	•17.2	×9.2	302
FA	12.2	19.0	20.0	•20.9	10.0	14.1	310
FB	15.7	18.5	18.2	14.3	•12.9	16.1	285
M	11.6	26.4	24.1	8.9	×4.6	•21.0	257
T	•21.6	23.3	23.3	14.6	5.0	11.3	300
O	15.5	23.0	21.0	14.9	8.8	17.6	295
Q	7.5	21.8	26.7	12.0	7.9	20.7	265
Y	8.2	•34.5	15.7	13.0	6.1	19.8	292

	b (経済)	c (政治)	b+c (政経 分野)	e+f (青年と 倫理)	a (現代と 人間)	d (文化)	a+d (文化エ コロジー)
SB	25.8	29.1	54.9	26.4	7.2	7.9	15.1
JB	27.5	25.4	52.9	21.1	12.7	12.7	25.4
JA	24.1	27.6	51.7	26.5	9.2	11.3	20.5
M	26.4	24.1	50.5	25.6	11.6	8.9	20.5
Y	34.5	15.7	50.2	25.9	8.2	13.0	21.2
Q	21.8	26.7	48.5	28.6	7.5	12.0	19.5
SA	22.4	24.4	46.8	26.7	12.5	11.8	24.3
LA	25.8	23.7	49.5	24.4	10.9	14.1	25.0
LB	23.6	24.6	48.2	25.6	12.0	13.3	25.3
H	17.9	26.2	44.1	20.3	15.3	16.0	31.3
O	23.0	21.0	44.0	26.4	15.5	14.9	30.4
E	22.9	20.5	43.4	33.1	10.2	10.6	20.8
C	20.0	22.3	42.3	31.9	10.0	12.3	22.3
K	23.7	18.9	42.6	28.7	10.1	14.2	24.3
D	18.6	24.0	42.6	27.4	16.2	13.1	29.3
G	18.8	21.4	40.2	27.6	14.3	14.9	29.2
FB	18.5	18.2	36.7	29.0	15.7	14.3	30.1
FA	19.0	20.0	39.0	24.1	12.2	20.9	33.1

「現代社会」考

ものである。これに対して下欄に位置づけた NB 社 T 社 FA FB 社のものは、文化エコロジーに 1/3 以上のウエイトをさき、環境 資源問題 文化人類学的分野など極めて新しい内容を盛り込んでいる。

政経分野の比重が全体としては大きな%を占めているのは(平均 45.8%)「当分の間」政経倫理の 2 科目の履修をもって「替える」ことができるという附則の在り方を意識すると当然かもしれないが、逆にこのウエイトのかけ方か、「現代社会」を「政経」・「倫理」とあまりかわりばえしない性格にしているともいえる。40%を割っている教科書が 2 つあるが、他はすべて 40~55% である。「青年の生き方」「倫理」[e]・[f] の比重はほぼ 1/4 (平均 25.4%) 「現代と人間」・「文化」[a]・[d] を合計した分野もほぼ 1/4 (平均 25.9%) でこの二つの分野は対応できる。そして、「政経分野」[b]・[c] に重きをおいている教科書ほど([e]・[f]) ([a]・[d]) の比較では([e]・[f]) に傾斜をかけ、「文化エコロジー」に重点目標をおいている教科書ほど「倫理」的内容を、「精選」している。

(2) 「現代と人間」についての取り上げ方

教科書の分析を試みる以上、全項目内容について分析するのか普通であるが、枚数の関係で第一領域の(1)に関する「現代と人間」(総論部分)についてのみ検討を試ろみ、「人間生活における文化」については、次節にまとめておきたい。

「現代社会」をどのようにとらえるかが、その総論的アプローチを試みる分野であり、かなりの教科書では、その導入部に章立てをしている。第 3 章にあてた

	b (経済)	c (政治)	b+c (政経分野)	e+f (青年と倫理)	a (現代と人間)	d (文化)	a+d (文化エコロジー)
NA	22.3	20.7	43.0	20.3	20.0	16.1	36.1
T	23.3	23.3	46.6	16.3	21.6	14.6	36.2
NB	30.3	14.6	44.9	17.7			36.6

り、第一領域のまとめの部分に位置づけている 3 種はむしろ、このテーマに重きをおいていると考えた方がよさそうである。内容的にはほんのプロローグ式にややふれる程度(J 社 N 社 Y 社 S 社)の記述をしているものもあり、中には 20 頁を費しているもの(K 社 H 社)もある。「現代社会の特色を概念化して、大衆社会 情報化社会 管理社会などの用語を単に解説するような取扱いをするのではなく」と解説されているのであれば、教科書の記述の濃淡かそのまま授業でのアクセントの置き方にはつながらずにしても、或る程度のめやすとなることであろう。

「現代と人間」の中項目 3 のうち後の 2 つはむしろエコロジーとして扱いたいので次節にゆづり「現代社会の成り立ちと人間生活」の分野のみ 13 種の教科書で内容を比較すると次の様になる。21 種を 13 にしぼったのは同様の傾向をとっている同じ社の A B を何れか 1 つにしぼり(L 社の場合 A B の後半は全く同じであり、N 社のものは同一執筆陣である)この分野のみについて、①冒頭の分野での記述にウエイトをさいているもの ②冒頭でなく各章の中で、それなりに「現代社会」を分析しているもの ③プロローグ風あるいは或る一面のみを記述しているもののそれぞれの内容を検討しようを試みたからである。

問題は頁数の割き方や、全体の中でのこの部分の位置づけではなさそうである。冒頭の第 1 章にそれなり

教科書	導入	産業社会構造	機械化工業化	技術革新	情報社会	組織の巨大化	組織化	官僚制と階級	都市化	地域社会の変容	核家族化	マスコミ	人案社会	国際化	備考
H	孤独な群衆から	○					○	○	○	兼業農家	○				終身雇用 04
K	両親の若い頃は	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	様々な社会集団 03
T	父母と子の対話		○	○		○		○	○				○	○	交通 05
G	都市化スプロール現象		○		○	○	○	○	○				○	○	教育水準の向上 04 全職の増大 中流意識
L	モタタイムス		○			○		○	○						現在の家族 03
J	3 章に位置づけ	○			○				○				○		高度消費社会 02
T	4 部のトップに		○			○	○	○	○		○	○	○		現代社会と家族 03
C	環境の後に		○		○		○	○	○	兼業農家	○	○	○		社会集団と人間関係 03
Q	変化する社会		○	○									○	○	(8)
\	オートメーション		○	○										○	社会的 つまみ 受 (4)
S	現代の世界をつくる人々		○												戦後世界の体制 第 3 世界 南北問題 (8)
M	十年一昔 世論	○			○							○	○		外部志向型人間の発生 コミュニティの喪失 (8)
\	第 2 部のトップ						○	○							社会集団の成り立ち 法の機能 (7)

(備考の数字は「数」)

の位置づけをし、又内容的にも現代社会の特徴的な面を適確におさえていると思われるもの(H, K, F, G)と、あえて冒頭への位置づけをさせて、各章の而るべき部分にまとめているもの(L, J, T, C)との本質的な内容へのとり組みの違いは見うけられない。かなり問題ではないかと考えられる数社のもの(※以下)についてのみ付言する。

そのうち、プロローグ風に軽く流しているのは2社。1つは「現代社会とわたしたちの生活」のタイトルで技術革新の波は昔と比べて現在を「機械化の時代」「国際化の時代」に変えてしまったが、この中で高校生の私達は?という問いかけから入ろうとしているもの(Q)。

今1つのものは、似たような指摘をしながら、「社会的つながり」の自覚と「愛をもつことが大切」(N)と説く。簡潔な記述はそれでよい。しかし、それならそれなりに今一つつきすすんだ洞察が必要であろう。

「現代の世界をつくる人々」という形で序編を書いたS社のものは、世界に視点をおき、増える独立国家、人口増、そして都市への人口集中をグローバルな視点で捉え、そして更に「現代世界の政治」「体制」転換しつつある現代を意識させようとする。それは、「現代社会」の生々しい問題から生徒の目を意識的に「世界」と「体制」へとそらせることにならないか。編者の「時代」認識のズレが問われそうな面すらある。それに比べると、同じくプロローグ風に現代の「産業社会」「情報化」「脱工業化」「管理社会」的側面にふれながら、現在かつての社会と質的に異なった「外部志向型人間」を誕生させたとする(M)社のそれは、この教科書を使って掘り下げは難かしいと感じながらも、そのユニークさは評価できる。

最後に今1社②に入れるべきかと思いながら③に枠づけしたY社のものは、「現代社会の組織」という取り上げ方をしながら、国家、地方公共団体、家族の「単位」をとりあげ、社会集団の成立を歴史的に眺めようとする。前述した「文化先行」型の内容のユニークさでは評価できるにしても、「現代社会」の規定の仕方、おさえ方はお粗末といわれても仕方がない。やはり問題である。

「現代社会」の中で「現代と人間」の章の占めるウエイトはその頁数にかゝりわりなく大きいと思う。この内容を欠いては各内容事項が「政治」「経済」「文化」「倫理」に分断され、「統一性」が失なわれるからである。「現代社会」の構成原理は、政治 経済 文化等の社会的機能の統一、再構成であり、それが分断されていたとしたら、むしろ旧指導要領の方がまともである。

第一領域と第二領域を分けて2人で担当するという

方式もその意味では好ましくないと思う。

## VIII エコロジーと文化の内容を求めて

「現代社会」の中でのフロンティア部分は第二領域の中の「人間生活における文化」であるか、この部分に第一領域の「人類と環境」「人口問題と資源エネルギー」の項目とを重ねあわせると、文化人類学と生態学にエネルギー問題をからませた、極めて現代的な課題に接近した分野を構成する。

高校の現場には、何を今更このような内容を「現代社会」の中に、という反発がある。「環境」「人口」「資源」はまだ「地理」の守備範囲であるが「文化」にいたっては現場に専門家のいない領域であり、「比較文化」論「現代文明論」という形では社会科のどの担当教師も魅力を感じずるテーマでありながら、いざ自分がこの部分を担当するとしたらしりごみせざるを得ない。「倫理」「政経」で「替える」ことができたなら真真きに社会科の分野から消える分野である。

しかしながらこの分野のアプローチを措いてはやはり「現代社会」新設の意味はないであろう。先述の教科書の中で(㊦+㊧)の%が、ほぼ25%(以上も)かけているもの15種、21%以下6種、文化の占める平均的%は13.3である。

「現代社会」の中で占める比率において少ない点が第一の問題であり、内容を検討すると千差万別なのが第二の問題である。

### (1) エコロジーの分野についての検討

エコロジーというのは或はなじまないかもしれない。現場ではやはり「環境」「人口」「資源」の問題であり、地理の領域としてうけとられる。そして地理専門教師にとって、この比重が軽くされているのが不満の様である。しかし、これはやはり「地理」であってはならないと思う。「生態系としての環境」(J)「宇宙船地球号」(H)(G)「生態系の中の間人地球の有限性」(L)「かけがえのない地球」(C)「環境とは何か、生態系とは」(T)というような教科書の標題はかなりエコロジーを積極的にとり入れようとしている努力として評価できる。逆に「自然環境と人間」「人口問題」「資源エネルギー問題」を「地理」の場合とほとんど変わらない記述スタイルで取り上げている教科書も全体の半ばに達している。

「宇宙船地球号」の発想はK, E, ホールディングによるものだが、ローマクラブの「成長の限界」(1972)とともに数社の教科書でふれている。この辺りが欧米で環境破壊の問題を地球的規模で問題提起した出発点であり、日本における文化人類学的・民俗学的志向、(国立民族博物館設置、ふるさと志向、元禄回帰)公害問題・環境問題への関心が、極めて複雑

にからまりながらエコロジーの分野を「現代社会」の中に定着させたといえよう。

教科書13種の中で前節と同じ手法で環境のとらえ方と人口、資源問題へのアプローチを3つに分類して俎上にとりあげてみる。

〔A〕「生態系の中の人間」を出発点にしながら、地球の有限性にふれ、環境破壊と資源、エネルギーの問題に迫り、豊かな社会とは何かを考えさせようとする類型である。

そのアプローチにもいろいろある。その前段階で熱帯地域、乾燥地域、温帯地域、冷・寒帯地域のそれぞれの自然、気候という地理的内容を学習した後で、環境破壊、資源・エネルギーの問題にせまる(G)というものから、ストックホルムの人間環境宣言や、OECDの環境委員会、環境アセスメントの問題にふれ(J)(L)(T)、発展途上国と、先進国の人口問題の差を強く意識させようとして構成し(J)、南北問題に(L)ふれる。又人間がいかに自然をかえてきたかに大きなスペースをさき、大気汚染や水質汚濁、地盤沈下の問題にもふれ(T)、又公害病、環境汚染の問題や石油問題にふれる(H)。或は以上の各問題にさらりとふれるもの(C)までいろいろである。

〔B〕この問題を特に環境問題としてとらえ、まず公害と生活(N)として、又人間環境の破壊と自然の回復として(F)、高度成長と公害として(M)把え、それぞれ、大気汚染、水質汚濁、鉱毒、食料品汚染、都市公害、地盤沈下などに視点をおよぼそうとするものである。

〔C〕エコロジーとしての扱いをさけ、又環境問題を「現代と人間」の内容に大きく位置づけるのでもなく、この項では国際的資源問題や人口問題をとり扱い(K)「環境の危機」をアピールし(Y)或はプレーリーの荒廃やインドの農村の人口問題をとりあげ(Q)更には現代を「科学技術の進歩と利用」についての人間の自己制御の可能性が問われている時代(S)と規定する。たゞしこれらの教科書のすべてが、公害については頁数を別にさいているのが特徴で、「工業化都市化と環境問題」の項で公害と国民生活を学習(K)し、「人間の尊重と公害の防止」(Q)「消費者保護と公害防止」(Y)、「豊かな社会の環境問題」(S)で公害と社会生活をめぐる諸題をさまざまな角度で掘り下げようとする。したがって公害に関する問題意識が欠落しているのではなく、この問題をエコロジーとしてよりはむしろ現在の経済社会の生み出した問題として取り上げる。その点では〔B〕と共通である。A以外の二つの類型はかつての政経・地理の中でも学習されていたとり上げ方である。エコロジーとはうけとめがたい。

## (2) 「人間生活における文化」

この分野も指導要領によって「社会科」の学習内容の中に正式に「認知」された内容であり「人間の営みとしての文化に目を向け、文化とのかゝりわりで人間生活を考える力を育て」ることがそのねらいとされている。

日本史の「文化の総合学習」世界史の「文化圏学習」と対抗関係をなすものである。

「世界の諸地域の文化」は既成の観念でいけば地理的分野、「日本の生活文化と伝統」は同じく歴史的分野、「現代の文化」は、中学の3年生の領域と見做されそうである。しかしこの縄ばりをそのまま踏襲しているのは「現代社会」を新設した意図から離れざるを得ない。

教科書13種を眺めてみたい。これも3つの類型に分けてみた。

第Ⅰ類型 世界の諸地域の文化を地域別に考察し、日本の文化についても風土性と伝統の両面から考察するタイプ。かなり地域性、風土性が重視され、N社のそれは諸地域の文化に入る前に気候環境として、熱帯サバナ、温帯、冷帯という気候帯ごとの記述を入れ、F社の場合は、アジア、アフリカと、ヨーロッパ、アメリカの風土文化について対比記述を試ろみ、文化交流の前提としている。日本の外来文化についても東アジア文化圏の中の日本、衣食住における日本の特色(F)を文化を考察する視点におき、或は、地域社会と伝統・民俗にウエイトを置く(N)型である。

第Ⅱ類型 文明圏、ないしは「××の文化」という形で世界諸地域の文明の類型を試ろみ、同時にその文化交流、伝播をとり上げる。日本の文化についてはその歴史的形成過程を重んずる型。文化の多様性という視点から各地域文化をとり上げる(H)ものや、文明圏として特有の宗教をもとに分析するもの(T)(L)或はその共通性に焦点をおくもの(C)、などさまざまであるが、日本の文化についてはほぼ同様に稲作文化、伝統的性格、祭りの性格、系譜、ないしは衣食住ごとにその生活の発展過程を辿ろうとしている。

第Ⅲ類型 世界各地域の文化については地域性にあまり深入りせず類型的に把え、むしろ文明論的な把握を試みようとする型。当たっているかどうかは別として日本の文化を「座敷文化」としてとらえ(K)「和と道理」、「誠の伝統」としてまとめ(Q)日本文化の「水平感覚」を取り上げ(J)「間取りの文化」(G)「ふすまの文化」(Y)としたりする。一つの文明論としてこのテーマに迫ろうとする教科書である。社会生活と文化を、「常識と個性」「慣習と文化」でアプローチしようとするS社のそれもこの類型に入れてよいとは考えるが、そのまとめ方は抽象的で要を得ない。

(3) エコロジーと文化のかゝわり

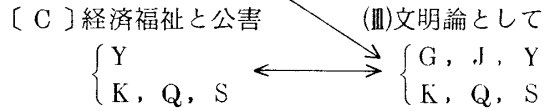
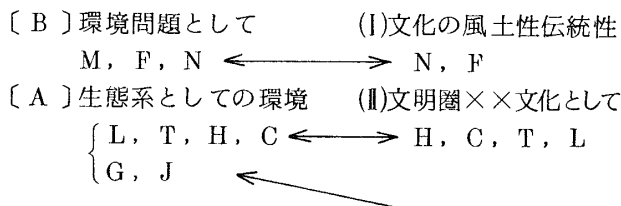
環境破壊が今ほど切実に意識されたことはない。

(よくよく考えれば人類の文明生成期に集住した人々が薪をきりつくして緑を砂漠に変え、或は産業革命期に石炭・鉄がほりくずされた時も多分世の中が悪くなったとは感じただろうか) 公害、エネルギー資源の枯渇、そして新しいエネルギー資源の選択に人々は困惑している。一方に人口爆発そして食料問題の深刻さが迫っている。何が今切実だといえ、これらの問題を措いてほかにないだろうと思う。そして一方に地域開発の波が古い文化の跡を消し去り、古墳や野鳥の住みかが荒らされ、住宅地の造成が沃野を埋没させてゆく。文化とは一体何だろうかという問いも、又現実のわれわれに切実である。

にも拘らず社会認識を担当する教科である社会科がこうした問題に対して耳をふさいできたのは、多分に社会科教師の専門性が地理、歴史、政治、経済、倫理の領域を意識しすぎて、領域外の問題について意識的に避ける傾向をもち、又新しいテーマ領域、例えば江上波夫氏の騎馬民族説だとか梅棹忠夫氏の文明の生態史観など、十数年前の論説であるにも拘らず、社会科の内容の中には正当に位置づけられてこなかった。文化人類学もそうだし、柳田民俗学もそうである。不勉強といってしまうとそれまでであるが不勉強とは違う。社会科教師であれば多分に関心はある。大野晋氏の日本語論についても雑談としてだったら多分授業のどこかでふれている。にもかゝわらず、正当に位置づけられていないのである。

新しい「現代社会」の中にも、エコロジーや文化はまだ正当に位置づけられていないと思う。日本の経済は中学の「社会科」に任じてしまって「現代社会」では、もう少し広い視野での経済や文化の問題を生態学的に或は文化人類学的視点から(私は地理学をこゝでやる必要もないかわりに、生態学や文化人類学・民俗学を「現代社会」で勉強させるのでもないと思う)検討し、「現代」に生きることのむずかしさをたしかめ考えさせる場を提供してくれればよいと思う。

先に私は教科書の中であって、環境資源の扱え方として〔A〕〔B〕〔C〕の三つの類別を試み、又「人間生活と文化」の把握のしかたとして〔第Ⅰ類型〕〔第Ⅱ類型〕〔第Ⅲ類型〕をあげてみたが、その2つの類別を相関づけると次のようになる。



即ち一方で環境の問題を公害として取り上げている教科書は文化をその風土的、地域的、伝統的なものとして取り扱っているが、第一の問題を生態系の中の環境としてエコロジーの見地からの扱いをしようとする教科書は2つに分れて、1つは、文明圏、××文化という形で文化の同質性、異質性に目を向けようとし、又1方では文明論として典型的な論説でまとめようとする。〔C〕の環境と人間についてはおぎなりの記述で、むしろ経済の中で公害、環境破壊にふれるという型の教科書は、一方の記述を文明論的論旨でまとめる傾向がみうけられる。

私は〔B-Ⅰ〕類型(エコロジーというよりはやや地理的、地域的)と、〔A-Ⅱ〕類型(エコロジー、文明圏の把握)が今後のこの領域の構成原理となってゆくだらうと考えるし〔C-Ⅲ〕という類型はエコロジー以前の「現代社会」の構成でしかないといってよいと思う。K社のそれなど他の面ではかなりのユニークさ、新らしさをもっていることは評価できるがエコロジー点視点が不足しているからである。

Ⅹ まとめにかえて

以上の「現代社会」論は、授業の中で「現代社会」をすましていない段階の、教科書を一瞥したばかりの現代社会論である。自分のメモとしての意味しか持っていないかもしれない。しかし21種の教科書はいろいろの欠陥にもかかわらず、ある新らしさを持っている。

「世界史」が出発した当時の教科書のもっていた漸新さである。政治、経済の分野にふれなかったのは、この部分については「政経」の内容とそれほど違わず、したがって各社の内容も大同小異であると判断したからである。それ以外の分野の成否が「現代社会」の成否につながると思う。

なおこの稿の素材としての教科書の分析については名古屋聖霊短期大学の中尾正三氏から多大の御教示とデータ提供の御配慮にあずかった。付記して謝意を表する次第である。

※(1)都築亨「世界史・日本史の統一的認識」名大附属研究紀要 第16集

(2) 高等学校学習指導要領解説	社会編	P 8
(3) " "	" "	P 14
(4) " "	" "	P 17
(5) " "	" "	P 33